

三十五、信心の智慧

本月号の「聖光」には、「諸仏三業莊嚴して 畢竟平等なることは 衆生虚誑の身口意を 治せんがためとのべたまふ。」という、曇鸞章の本願一乗の妙旨を示された和讃について頂いておいた。

浄土の主伴平等一如の三業莊嚴のすべては、衆生の虚偽にして狂える三業を対治して、その三業に如来本願の功德を顕現廻向せしめんとの、本願一乗の大用を語られたものである。

「衆生虚誑の身口意」との言の中には、鋭い信心の智慧が光っている。衆生の三業の一部分が悪いというのではなくて、その全体が、より高き仏智よりすれば、すべて転倒虚誑であることを、深信せしめられたる風光がうかがわれる。

一部分が悪いとか、低いとか言うのでなくて、全体が低いとか、全体が死んでいるとかを知るのには全一なる智慧が光らねばできぬことである。

一つの仏像がある。その出来上がりにおいて、どれだけそれに手間を入れて磨いて、部分部分はきれいにできていても、全体として見た時、仏の円満、円融の徳が表れていないならば、死んだ作品である。事はレベルの高下いかんの問題である。

人にはみな信ずるところがある。一匹の繩といえども、やっと誕生日が来たばかりの子ともいえども、けっして大人の意のままにすることはできない。平素従順に見ゆる子どもでも、一度癩癩を起こせば、容易に親に従わない、いよいよ堅く信ずるところを明らかに發揮するがごとくである。匹夫といえどもその志を奪うべからず。みな各々信ずるところがあつて動いている。であるから、宗教のあるなしに関わらず、人は一つの信ずるところを守つて動かざる者あり、一つが破壊すればまた次と、信念の移動をとげつつ生きる人あり、靈魂ありと信じ、信念ある二人が角つき合わせて口論するあり、すべて信念のしからしむるところである。

かかる信念は、多くは剛直、硬直、強梁なものである。そのあまりに強梁なるものは、自分は他人に対しては、勝手気まま、臆測、推量、邪智、嫉妬などから、でたらめな妄断を下して、人をして辟易せしめ周章せしめて、しかも堂々と闊歩し、他人の自己に対する批判は、たといそれが当たつていようが、すべて言うを許さず、もし一言でも、批判がましきことを聞けば、百千言をもつて応酬する。かくのごときにおいては信念とは、他人をして自己のすべてを肯定せしめ、己よりほかの者のすべてを打ちのめして、価値を認めぬことである。

人はみな自己をもつて万物を計る尺度とする。悪の泥道を歩んだ者は、自己の経験したすべての材料を集めて、それをもつて人を見る。それが度を増せば、かかる道を行かぬ者を見れば、愚劣者と映じ、あるいは偽善者と受け取られる。

また狭き独善の人は、己のみ正しと主張し、人の微細なる悪すら許さず、いつもしやちこばつて、かえつて人を責め苦しめて、闇の中心となる。

善悪いずれも信ずるところあり、しかも両者とも間違いは同一である。かかる心の動きは、その度こそ違え、人みなこれを持つている。その全体をして光に照破されないならば、ついに執着のみにこの世を終るであろう。

かかる固定したる心では、たとい靈魂不滅を主張するも、靈魂の滅を信ずるも、念仏するも、題目を唱うるも、浄土ありと言うも、無しと言うも、すべて同じことであつて、邪見我慢の二相にほかならない。わが聖人が、信心の智慧を重んじられたゆえんがここにあるのである。

昔聖人世を去りたまひしころ、念仏行者の中に二派ができ、一は名号不思議を信ずると言い、一は誓願不思議を信ずるのだと主張した。この事は、『末燈鈔』に、御開山より、教名坊につかわされたお手紙にも、

「誓願名号同一事。御文くはしく承り候ひぬ。さてはこの不審しかるべしとも覚へず候。その故は誓願名号と申してかはりたること候はず、誓願を離れたる名号も候はず、名号を離れたる誓願も候はず………」とあり、

さらに十章、十一章、十二章など、すべて名号不思議、誓願不思議についての不審に答えられたものである。『歎異鈔』には、この誓願、名号の異同についての論諍がその中心問題となつている。

名号不思議を信ずる人は、お念仏申すことに力を入れたに違いなく、誓願不思議を信ずる人は、教えの領解に重きをおき、信心の深さを問題にしたであろう。お念仏を申す人は、誓願派から見れば愚者、ばか者の集まりに見えたであろう。名号派から賢き誓願派を見れば、世にも恐るべき悪人の集まりに見えたであろう。そこで、名号派からは、「弥陀の誓願不思議に在しませばとて悪をおそれざるは、本願ばかりとて往生かなふべからず」と、自らは、念仏行を一心不乱に執持する立前から、誓願派の人が、不法懈怠な悪無碍の人に見え、それに対して、誓願派の人は、愚なる念仏行者に対して、自力の念仏は辺地の往生である。しかもその「辺地の往生を遂ぐる人ついに地獄に墮つべし」と、「学生だつる人」即ち賢い人たちが、言いおどしたのである。汝らのごとき無学者にわかるか「学問して来い。」とやりこめる。こうした両方の人たちに向かつて、そのどちらをも誠めたのが『歎異鈔』であるようだ。

いつの世でも、多少は、こうした相のあることが思われる。自ら学問もし、領解を重ずる人は、賢愚の問題が超えられず、行を重んずる人は、自ら行に固定して、進展を欠ぎ、善悪の問題においてつまずく。時に賢き人は、己が才学にあやまられて、悪人正機をはき違えて悪無碍となり、放縦となり、善人とうぬぼれる行の人は、信心の智慧海に入ることができないで、自力策励におわる。そして他に対する冷き裁きは同一である。行住座臥の念仏行によつて、よく不退転の人たるべく、教えに深く聞き入ることによつて、本願海の深さに入るべし。聞法深信なき念仏行は、生命の固定化で

あり、念仏なき信心は、単なる解信にとどまり、概念の遊戯となり、果ては、仏道もまた一つの僥慢の因となる。

行儀の整備は、文化現象には必ず具わるものであり、形式化によつて、命は流れるのではあるが、もしそれが型となり、固定化し、凝結し、進んで生命よりもその形式がものを言うに至つて、ものは必ず墮落し、沈滞し、やがて滅んでくる。そこに、新しい生命は、必ず型を破つて生まれてくる。古き形式の人は、彼らをよぶに悪人もつてし、新しきものは、古きものをよぶに愚者をもつてする。しかし不斷に新しき生命を蘇らすものは、経教の深き領解にある。み法を聞かんとする心の勃興にある。されば浄土真宗にあつては、行の固定化を許さず、不斷の鮮活なる寿命の廻向を重んぜられるがゆえに、「眞実信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。是の故に論主建はしめに我一心と言へり。」と帰結されたのである。

賢愚の問題を真に越えて大愚に至る者は、善悪の問題をも超えて、罪惡の機を深信するであろう。なぜならば、かかる一切は、ただ如来智慧光、本願の名号によつて信知せしめられるのであるがゆえに。いかに形の上の善人だからとて、善悪の問題を超えたのではない。同様に、悪いことを平氣で行つて、それを隠さず人に告白したからとて、それはただ、惡の心臓の強さであつて、超えたのではない。賢愚もまたしかりである。無学文盲の邪見な老婆といえども、それだけでは真に自らを愚者とは思わず、世界的の大聖者も賢者とは思わないであろう。されば、善悪賢愚の問題は、その内心に開ける智慧の問題である。

3

如来は、人間の理性よりも高次的立場に君臨して、その人格的統一を畢竟平等なる名号のうちに撰めたもう前に、人間の理性をしてその麻痺状態よりさままして、十九顔的道義の人たらしめ、さらにその中にはらむ自力の菩提心の果遂によつて、理性的權威、即ち私の内的崩壊を遂げしめて、理性の機能をして宗教的内觀の道場たらしめたもう。

時に宗教人たる以前に、いまだ道德的人格さえ疑われるは、この三願転入による一念宿善開發の契機なく、究竟的自覚において開けたる大信海の無碍の風光を、一時的な芸術的感情によつて弄び、かえつて理性をして魔事に眠らしめ、やがてその毒素の中毒によつて、ついに救うべからざる状態にまで至るのである。

大乘仏教を語る前にまず眠れる理性をさまざまさざるべからず。

空觀ということは、仏教の深義の一つである。我および我所において空を悟り得ない者は、智慧成就せざる者とせられる。しかるに、『菩薩善戒經』二には、次のごとく説いてある。言わく、

「我見有る者は、仏法を壊せず、空の義を解せざるものは、永く仏法を壊し、破失滅没す。我見を生ずる者は三惡に至らず。空の義を解せずして人の為に広説せば、当に知るべし、是の人は必ず阿鼻に到る。我見有る者は三宝を謗らず。妄りに空を説く者

は三宝を誹謗す。我有りと説く者は、衆生を誑かさず。実性を謗らず、法性を妨げず、解脱を獲得せん。他人をして禁戒を毀犯せしめず。空を解せざる者は一切法を謗る。実性を解せず。法性を解せず、解脱を妨げ、多くの衆生の与めに悪知識と作る。自ら戒を持たず人を教へて毀禁せしむ。常に楽しんで無作無受を宣説し多く衆生をして地獄を増長せしむ。是の義を以ての故に名けて無上仏法を遠離すと為す。」

以上の説は、一見不可解のようである。我見とは、少くとも空の理を知らず、無我に反するものである。しかるに、我見を生ずる者は三悪道に至らずと言ひ、三宝を謗らず乃至衆生を妨げずと言われ、空の義をよく知らずして説く者は、必ず阿鼻地獄に到ると言ひ、また他の衆生をして禁戒を犯さしめて、解脱を妨げ悪知識となり、自ら持戒せざるのみならず、人をして戒を破らしめて地獄を増長すると説かれる。

憶うに、我見があるとは、空の理を知らざれども、因果を信じ、因果を信ずるがゆえに、自ら身を謹み、人間として守るべき戒を持ち、三世を信じ、三宝を尊重し、人にも教ゆるがゆえに、大乘の至極の境には至らずとも、自らあやまらず、人をもやがて解脱を得るに至らしめるのであろう。しかるに、自らも眞実智慧によつて空を悟らず、よくわからない者が、これまた三毒を命としている衆生に「一切は空じゃ。仏も空じゃ、地獄も空じゃ、悟のもつて求むべきなく、迷いのもつて捨つるべきなし。罪悪というも空、涅槃というも空、空というもまた空である」そんなことを言つて聞かせば、衆生は得手勝手にこれを受け取つて邪見を増長して因果を無視し、道を破つて平気なものになるであらう。

以上に類する失は、浄土眞宗においてもまた犯してきたことを遺憾に思う。なんらの道心もなく、能うかぎりの我欲を生命とする者に、信心獲得せしめず、名号の智慧光によつてその邪見の機を照破深信せしめることなく、大海に廻心懺悔帰入することなくして、ただ、虚誑の身口意のままを、そのままに肯定せんか、因果の世界を横超せしめて、本願力によつて、大愚大悪を智慧のうしおに、煩惱の氷を功德の水に転成せんとする大悲の誓願も、因果発無の外道の世界に逆転せしめて、地獄を増長せしめるであらう。

常識でものを考える場合、人は理性の判断に対しては、これを正しいものとし、責任の所在を理性の上において、人間心そのものが顛倒虚誑であることを問題としなさい。如来平等の智慧光によつて、静かに、この衆生心そのものの正体を見とどけて行く所に、信心の智慧が光る。強梁なる自力の信念はそらごととして滅び、如来久遠の月、衆生心に満ちたもう。